

D-2 台所流しの適正深さに関する研究 (その7)

流し底高さが作業姿勢におよぼす影響

大阪樟蔭女大

一棟宏子

伊海公子

目的 本研究は台所流しの適正深さを求めることを目的としている。前報では食器洗い作業をとりあげ、各流し底高さにおける作業のRMRと疲労、主観的適合評価との関連について報告した。本報は流し底高さの変化が作業姿勢にどのような影響をおよぼすかを考察し、あわせて前報の結果と比較検討する。

方法 被験者3名を対象に、8種類の流し底高さについてクロノサイクルグラフ法を用いて、正面および側面の作業姿勢を撮影した。流し底高さ、リム高さなど実験実施条件は前報と同じ。実験時期は1978年7、8月。

結果 1 作業姿勢は流し底高さが低い位置から高くなるにつれ、前傾姿勢から直立姿勢に近づき、動きも比例して小さくなる傾向がみられる。2 各部位別に、高さ、振幅、動きの軌跡のパターンについて変化をみると、流し底高さの変化に最も影響を受けるのは頭、肩、肘であり、腰、股関節は比較的变化が小さい。3 同じ流し底高さであつてもリム高さにより変化がみられる部位は肩、肘であり、流し底が高い位置で85cmの場合姿勢は反りぎみになる。4 作業姿勢が自然な直立姿勢に近く、各部位の動きが小さく、かつ手首の動きが肘より上にあがらないことを条件に適正作業姿勢を検討した結果、各被験者の身長比約42~45%の流し底高さがよいと判断される。5 作業姿勢からみた至適流し底高さの範囲と前報で得られた結果を比較すると、ほぼ対応している。